

せたかむい

発行・古平町史編さん室
文化会館 84212590
第206号・平成18.11.1

年表で読む 古平の歴史

[111]

林業

◇ 戦時記念植樹

明治三十七年二月、日本とロシアの間に日露戦争が起きた。町では戦勝を祈願する意味をこめて、戦時記念植樹計画を町会(町議会)に図り承認を得た。

そして新地町寺ノ沢(旧みなと保育所の奥附近の未開地の貸し付けを受け、植樹を予定していたところ)の中に個人への貸し付け地があつたため、群来村の町有地に変更して同年一〇月から植樹を始めた。

人夫により刈り払いをし、児童や生徒に愛林を体験してもらおうという意図もあり、古平尋常

高等小学校高学年の児童・生徒が植樹とその後の草刈りなどを行なつた。植樹は三九年まで続けられ約一万本の落葉松が植えられた。苗木は一本四厘で、造林費は約一〇〇円であつた。

◇ 共同薪炭林管理

このち町では、町基本財産のための特別会計を定め、浜町大字ロクシナイ(約五十四万坪(約一八一〇)と、港町大字チヨペタン(約二十一万坪(約七一〇)の国有未開地の貸し付けを出願し、財産造成のための植樹をする事になった。

その後「基本財産蓄積」「共同薪炭林管理」「小学校営繕林造成」などの規則ができ、農地とな

つたところもあつたが、昭和二十一年の農地改革により国に買収される事になった。

大正一〇年、古平町住民の自家用としての薪炭を供給することを目的として、チヨペタン沢に三八七町歩(約三九〇)の薪炭林を造成することにした。伐採する木の太さや一戸当りの数量などを定めたが、価格は町会の決定によることとした。

また、外にロクシナイ・ヨシヤチにも薪炭用として自然林の育成や植樹を行ない、あわせて防火線や林道なども設置した。これらの費用は、基本財産からの収入によつて補うこととした。

◇ 民有地の植樹

明治三〇年(一八九七)、「北海道にある国有未開地を処分する」という法律によつて、国有未開地の払下げが行なわれた。古平は薪炭を伐採した跡地が主な土地が払下げ地となった。

この頃は鯨漁にも恵まれていたので、個人がその資力によつて国有未開地の払下げを受け、主に落葉松の造林をすることが盛ん

になった。

大正九年、新たに「荒廃地の造林補助規定」が定められ、荒地などに造林する場合は、その経費の三割から五割が補助されるようになり、民間の造林事業は急速に進展した。

さらに大正一五年、民有林の奨励事業として、「苗木の無償交付」「樹種による造林補助」「耕地の防風林造成補助」などと補助事業が次第に拡大した。

これまで造林は落葉松(カラマツ)が主であつたが、長野県がその原産地であつた。落葉松は何よりも生長が早く、建築や漁業、鉱山などでの用材として多く使われ、開拓が盛んに進められていた北海道にとつて好適な樹種であつた。

しかし、北海道の特産でもあるエゾマツ・トドマツの造林が、経済的に有利であることが次第に認められるようになり、これらの苗木も無償で交付されるようになった。

この頃、古平町でトドマツの造林を行なつたのが公園部落(現在栄町)小野寺地作で、裏山のトド

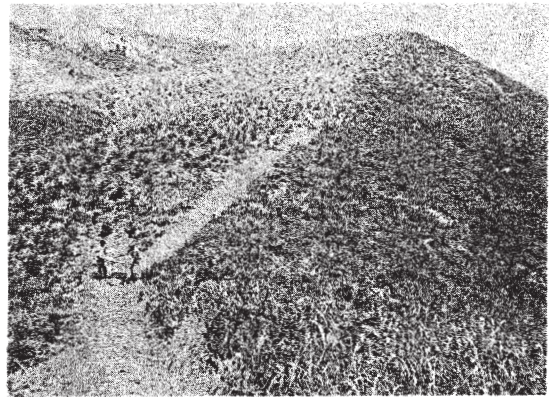
マツはその頃のものである。

◇民有の人工造林

浜町高野常吉は民有林の人工造林にはことのほか熱心であつた。自家農園には苗圃を設置して「松華園」と名付け、長野県からカラマツの幼苗を購入して育成していた。そして、苗圃や造林作業のために常に一〇余人を雇い入れて、地ごしらえ、植え付け、下刈り、防火線の設置、間伐、蔓切り、枝打ちなどを先がけて熱心に行なつてゐた。



→スリバチ山の落葉松造林地



←高野常吉植林地（大正一三年）

沢江村桂の沢、パンの沢の造林をし、さらにスリバチ山、ハイカラ山などにも造林し、その総面積は約百畝にも達したという。当時の女雇い一日の賃金は弁当持参で三十銭であつた。

(浜町渡辺吉郎談とある)

大正一一年、皇太子殿下が本道へ行啓になったとき自ら落葉松の種子を蒔かれた。それが生長し、大正一四年一月、その落葉松苗木が古平尋常高等小学校と沖尋常小学校に五本ずつ下付された。だが、折から降雪きでもあり一時

仮植し、翌大正一五年四月、それぞれ校庭に植樹したが、その後のことは不明である。

大正一二年、古平町農会では会員の要望によつて、杉苗五千本・代金七円五〇銭、杉種子二升・代金四円、落葉松一年生苗二万五千本と種子五升・代金四一三円を共同購入し配付した。

このうち杉の多くは適地でなかつたのか雪折れや枯死し、限られた場所にししか生育出来なかつたようである。

◆造林の功労者 高野平治

浜町・高野平治は、明治三年
浜町冷水川右岸の所有地約一畝

萬世播種法心得

苗床造方

苗床、造六先、播移當年、秋季田亦烟、
鋤返、置之、推卓小石、亦除、耕耘、翌年三月
下旬、四月、又正度鋤返、土塊、採薪鋤之、
耕三、二年乃至三、位、畦、築、土、區、更、更、心、心、
々、々、南北、延、延、畦、畦、間、間、路、路、設、設、恰
々、地、壇、乃、乃、於、於、立、立、以、以、障、障、及、及、日、日、夜、夜、十

→「落葉松播種法心得」

高野平治は自分の経験をもとに、種子からの育苗の仕方を丁寧の説明している

に植え付けた落葉松林三〇年生を、昭和二年、後志支庁主催の第一回造林品評会に出品し、三等賞を受賞した。

落葉松苗木は、始めは長野県から幼苗を購入し、苗圃で育成して植え付けをしていたが、明治四十二年（一九〇九）、高野平治らが長野県から落葉松の種子を購入し、苗圃二枚で種子から育成し好成績を挙げられるようになった。以後、古平町内での造林にはその松苗が使われるようになった。

治は自ら植樹翁と称す
造林に意欲を燃やして
内の希望者にはトドマ
ツ苗木を三本、五本と
無償配付し、造林事業
への関心を高め普及に
當じた。

昭和十一年、北海道で行なわれた陸軍特別大演習には、造林事業功労者として、古平町からただ一人賜饌（しせん）天皇から食膳を賜ることに招かれた。

大正十四年
く 続 き

▼六月二十七日

起床六時、天気快晴、熊さんと妻、天野さんは農園行き、今日は草取りをするとのこと。相撲の割引札を貰っていたので、悦三を連れて一二時頃出かける。大勢の見物人が入っている。なかなかよい相撲取りもいる。昨日は大入りであったそうだが、今日は七、八分の入りだという。予想よりよい相撲取りが来ている。四時頃に終り帰る。この日、角向かいの末政弟さんの家で建前がある。今までの家よりかなり大きい家が建ち、大火の後には町の体裁もだんだんよくなる。

▼六月二十八日

起床六時半、天気快晴、熊さんは女出面二人、コノさん、ソノさんと今日、初めてリンゴの袋掛けに行く。一〇時頃、私は自転車で行く。八時頃、大謀用のアバ縄と大綱の値段表を渡す。おつかさんといろいろ話し、一一時半に辞し、四、五軒月末の集金に回る。目に寄り二時頃帰る。若林さんが来ていて話をし、その後、沖村方面の集金に回る。聞けば水産組合の渥美さん、昨日六時頃に磯舟で釣りに出たが帰らず、今朝、舟の中で危篤状態になっていたとのこと、脳溢血で急に具合が悪くなったのだろうとのこと。昨日の五時頃、風呂屋で私等と元気に話していたのに、実に意外なことだ。

▼六月二十九日

起床六時、昨日からの雨が降り出し農家は大喜びだ。今日も時々小雨が降る。熊さんは月末の集金

高野孝作さんの日記から
当時の世相を見る

<117>

朝から雨が降り出し、加えて風が吹き時化模様になった。熊さんは沖村、沢江方面の集金に回る。この日は三〇〇円ほどの集金があった。午後三時頃、鎌倉建長寺の管長菅原時保禪師が来られる。四時から学校で講演があるとのこと、五時過ぎ、雨もいとわずに行つたら終つたところであつた。七時、渥美さんの通夜へ行き、八時から禅源寺で管長の講演を聞く。「人生の三

ある。今日も時々雨が降り時化。渥美さんの葬式があり、一〇時合葬する。午後一時から禅源寺で菅原管長の講演がある。題は「国民の心得」でなかなか有益なお話であつた。三時半終る。この頃はあちこちで不景気の話ばかり聞く、村田こうじ屋で突然いなくなりセリをやつたとか、また逃げる人もあるとか。

▼七月二日

今日も朝から大雨が降り出す。加えて風も強く海は大時化だ。雨不足で困る困ると言っていたが、今度は降り過ぎる。リンゴ作りもずいぶん少なくなった。一〇年前だと今頃の時期は賑やかであつたが、近年は一年増しにさびしくなる。腐乱病が激しいから、向こう一〇年も経ったら絶えるかも知れぬ。若林さんが来られて、店の負債整理のこといろいろ尽くしておられるが、世の中が不景気のため、財産があつても値打ちが無く、買手もないので整理にも困るのだ。

▼七月三日～七日まで欠

▼七月八日

三日間の小樽行きで今日は疲れ、七時半起床する。天気快晴、熊さん

に出かける。熊さんの集金と店の入金とで三五〇円ほど入った。あと二、五〇〇円ぐらゐは入金の可能性がある。農家にとっては今日の雨は実によい雨であつた。夕方になつて雨は止んだので、熊さんと妻はナス苗、花苗を植付けに行く。共

立大謀の官本さんからアバ縄四〇〇丸、綱五〇個ほどの注文があり引き受けた。

▼六月三十日

大要件」と題し、精神修養についてのお話であつた。大いに益するところがあつた。一〇時帰る。風が強くと海は時化、今日にはわかに寒く寒暖計は六二度F(約一七度C)、再び拾(あわせ)と羽織になつた。

▼七月一日

いよいよ七月になった。店はイワシ網漁もなく、イカ漁もまだ早いのでさびしい。綿糸はこの頃また高くなり、三二〇円ぐらゐの相場で

んは半さん、コノさん、ソノさんらと袋掛け、妻は加瀬さんで赤児が死んだというので行く。店は閑散、祭礼も明日になったので戸外に旗を立てたり、花など飾るところもある。(㊂)干場では新派の関一座の芝居があるので小屋掛けしている。自分らが子供の頃はよくこんな仮小屋で芝居をやっていたものだ。その頃は面白いと思った。向かい角の末政では祭り前に開店するとして、昼夜兼行で造作をしている。

▼七月九日

来る一二日、当地で飛行機大会あるとて会券を売りに来る。なかになか賑やかなことならん。今日から当地の祭礼宵宮祭だ。熊さんは女連中と袋掛けに行く。私は店番。夏イカ五、六〇あてとる。電気会社では祭典灯をぜひ頼むと来る、再三来るので五灯だけつけることにした。(㊂)行き岡崎からの預かり物を届けに行く。夜は子供達を連れて宮参りに行く、七時に出かけ、(㊂)で休みゆで卵を馳走になる。小さな店が三(新地町泉洋品店の前から、神社の入り口辺りまでびっしり並んでいて賑やかだ。見世物を見物してアイスクリームを

食べ、一〇時帰る。(㊂)干場では芝居があり、ドンチヤンやっている。

▼七月一日

起床七時、今日は祭礼、幸い好天気で市中賑やか。午前中は店を片付け、びようぶ(屏風)を立て花などを飾る。町はお祭り気分で皆晴れ着を着て、嬉しそうに歩いている。午後五時、沢江まで神輿をお迎えに行く、人出が多く大変な賑やかさだ。今年は子供の山車は沢江から大黒さん、港町から恵比須さんに弁天さん、丸山町から樽神輿が出た。飛行機が来ると町中は大騒ぎして皆待つている。去る八日、寿都町で大火、一五〇戸余り焼失せりという。気の毒なことだ。

▼七月二日

飛行機が札幌から来る予定のところ、あと一日延びて明日になった。起床七時、今日は浜中方面のお祭り賑やかだ。降らず照らすの天気で涼しい。九時頃自転車銀行行き、預金をして帰る。お祭りの行列はちょうど困前まで来ている。早速礼服を着てお供役だ。涼しくてよい。浜中を回り、本陣の橋のところで見送りする。一時頃から雨がポツポツ降ったが、小降り

お祭りには差し支えなく幸いの天気でよかった。積丹から若林嫁さん、曾我姉さんらが飛行機見物に来る。(㊂)干場の芝居見物に妻とトミらが行く。

▼七月二日

お祭りも無事にすんで町の人もひと休みのところ、今日は札幌から飛行機が飛んで来ると大騒ぎ。午後四時出発すること、土場附近は二時頃から人で黒山だ。家でもコノさん、よし子と私の三人が留守番で皆見物に行く。私は屋根に上がって見る。四時二〇分着というがなかなか来ない。六時二〇分頃、ようやく上空に見えたと大騒ぎ。私も屋根の上から見たが実に壮観だ。五分ほどで着陸したが、柳の木のあるところを芝生と思ひ着陸、それに小川があったので機体を埋めて破損する。せつかく楽しみにしていたのにこの体、修理に七日以上はかかることだ。

▼七月三日

起床七時、昨日の飛行機の破損は実に惜しいことをした、美国、積丹方面から見物に来た者も沢山いた。この分では当分飛ぶことは出来ないだろう。朝、銀行へ行き、帰り

(㊂)寄り話をして一〇時帰る。どこへ行っても飛行機の話で持ちきりだ。壊れた飛行機を見ると、土場方面(沢山の人が行く。午後一時、学校で星製菓の「冷凍」についての講話がある、新発明に驚く。三時から飛行学校長川辺氏の飛行機に関する講話がある。

▼七月十四日

起床七時、曾我アイちゃん、若林さんの一行が本日帰ると、一〇時頃、妻とソイさんが見送る。この頃から暴風が砂塵を飛ばす。熊さんは天野さんらと袋掛けをやる。本日まで三万ほど掛ける、順調にいつている。

▼七月十五日

今日は祝聖会の例会日、四時起床して出かける、第三番目だった。帰って銀行へ行き、(㊂)寄り正午頃帰る。午後二時から学校で父兄会の役員会があり行き、午後五時に終ってから、(㊂)でまたいろいろ話す。来る二〇日には第七師団第二六連隊第一中隊が、古平から岩宇方面へ行軍すること、町として歓迎方法について協議する。珍しいことなので町は賑やかならん。

▼七月一六日

起床七時、熊さんと妻、コノさん、それと出面五人で袋掛け、今日でたいてい終りそうだ。店は閑散、今朝、イカ五〇〇〜一〇〇あてとれ、イカ売りの声がする。一〇銭に三ばい、まだ初物だから高い。今日は近頃にならない暑さ、八〇度F(二七度C)まで上がる。向かい角の末政では久し振りに氷を掻く音がする。暑さで氷水もよく売れるようだ。たらいに湯を入れ、子供から家中で生水をする。

▼七月一七日

昨日からずいぶんムシ暑いと思っ
ていたら、未明から雨が降り出す。
一日中降ったり晴れたりだった。ム
シ暑い日だ。熊さんは午前中家に
居たが、午後から農園へ行く。来る
二〇日、軍隊が行軍して来て一泊
すること、町はいろいろ準備
に忙しい。夜、傘と買い練の勘定
をする。一三〇円ほどの利益があ
り、六五円あてで分配した。

▼七月一八日

朝から小雨がシヨボシヨボ降りム
シ暑い日だ。日中は白地軍衣でいる。
軍隊が一泊することで宿泊の割り
当てをしたので、どこも支度で大忙
しだ。小雨は蒔きつけにちょうど

よいと、熊さん、妻、ヨシさんらは
農園へ大根蒔きに行き、午前中に
終り帰って来る。家でも軍隊の宿泊
の準備をする。夜、林さんの通夜
に行く。ムシ暑く雨が降る。二〇日
は快晴でありたいものだ。

▼七月一九日

今晩まで大雨、大風であつたが、
六時頃になつてないできた。一昨日
来の雨も今日になつてようやく晴
れた。いよいよ行軍の兵士が来る
というので、宿に当つた家ではどこも
支度に忙しい。私の家でも二階の畳
を敷き替えなどで忙しい。熊さん
には今日は店の手伝いをしてもら
う。国旗、旗さおも新しいのを買
う。夜、学校で第七師団主催の活
動写真(映画)があり見物に行く。
一〇時半終つて帰る。ムシ暑かつた、
カが出始める。

▼七月二〇日

今日、軍隊が余市山道を越えて
古平に来る日だ。町では各所に大
国旗やら歓迎門などを作り、各戸
では国旗を掲げて歓迎準備もでき
た。宿泊所の家ではご馳走作りで
大騒ぎ、私の家でも四時頃から起
きて、家中でモチつきをやる。イカ、
テックイ、玉子、ビール、などを用

意する。私は皆と共に歌棄まで出
迎えに行く。予定より遅れて四時
頃着く。迎えの人や一般の人で珍
らしい人出であつた。沢江より演習
をやり、種田干場では分列行進を
やつて七時に終る。私の家では入舸
と来岸出身者の二人だ。二階で大
いに歓待し、私もすこしメートルを
上げた。一一時休む。

▼七月二一日

昨日は軍隊の歓迎で、町中は未
曾有の賑やかさであつた。昨日泊
まつた兵士、今朝は六時集合とのこ
とで、家では四時頃から起きて支
度する。五時に朝食を出す、五時
半に出発した。私も種田干場へ行
く、隊列を組み行進ラッパも勇ま
しく出発した。郷社の忠魂碑に参
詣し、三〇分ほど休憩の後、余別
に向かつて行進した。何となく名
残惜しい、八時帰る。今日は珍しい
暑さだ。町はヒツソリとしてさびし
い。幸治、三時着の末広丸で帰省
す。子供らと共に破損した飛行機
を見に行くやら、畑へ行くやら喜
んでいる。

▼七月二二日

起床七時、相変わらず暑い天気
だ。しかし、今日は沖から風が吹

くので割合涼げやすい。兵隊さん
の歓迎騒ぎも一段落し、また待ち
はひっそりカンとなる。熊さんは相
変わらず農園行き、リンゴの袋掛
けも終り、玉も大きくなった。妻は
洗濯物で忙しい。

▼七月二三日

今日は朝から照り続き暑い日だ。
去る二〇日、土用入り以来毎日の
晴天と酷暑が続く。イカ漁も昨日
あたりから五〇〇〜六〇〇あてとれる
ようになった。函館方面へ出稼ぎに
行く者が多い。熊さんは相変わらず
農園行き、妻も午後から行く。
アジウリ、スイカなどの草取りや
肥料やりだ。店は閑散、たまにイ
カ釣り道具の客ぐらいのものだ。沖
村一米田の家財道具のセリ、明日
から④の空き家でやると今日
下見があり行く。見たところ別に
欲しいような物も無かつた。夜、宝
海寺で澤田、加藤代議士の行政演
説があり行き、九時半帰る。午前
中禅源寺では地藏参りがあり、妻
と子供らが行く。

▼七月二四日

起床七時、曇天であつたが一〇時
頃から小雨が降る。この頃の暑気
で作物の生育もよい。沖村の「米

田さんのセリ一〇時からだというので見に行く。大分人が集まっている。不況不況と言つても相当に買う人もいるものだ。

▼七月二五日

起床七時、今日は割合涼しい、白地をセルに着替えた。納屋跡に大根を蒔いた。朝顔の苗を中庭の鉢に植え込んだが、秋になったらきれいに咲くだろう。月末なので帳簿調べをやる。本月末に入金見込み高約千円ほどある。午後四時頃、自転車で行き、岡崎からの預かり物を渡し、夜食を馳走され六時に帰る。学生連が帰省しているの賑やか。飛行機の修理も進んでいるとのこと。

▼七月二六日

起床七時、割合涼しい。過日宿泊した兵隊さんから礼状が来た。イカ漁この頃不足でさびしい。店も閑散だ。子供らは日曜日なので川へエビすくに行く、こんな時代が一番楽しいものだ。四時頃農園へ行く、熊さんは出面四人と草取りだ。私はあちこち回る。この頃の好天で作物がずいぶん生長した。スイカ、アジウリなども花が咲いている。ササゲ、キウリ、七、八寸の

ものを五本ほどもいで来る。キクをとり、父と共に六時帰る。

▼七月二七日

起床七時、天気快晴、港町田中からサキリ上五〇本、中五〇本買う、値段は上一本五〇銭、中三五銭で安かった。熊さんと天野さんがサキリ運びをやる。午後から熊さんと久し振りにワラジがけで行く。昨秋植えた松の草取りをやる、大いに運動になった。四時頃に父も来た。スイカとアジウリの草取りをやり、ササゲ、キウリをとり夕方帰る。夕食後、たらい湯に入り汗をながす、気持ちよい。

▼七月二八日

起床七時、天気快晴、月末なので、熊さんは朝早くから沖村方面へ集金に出かけ、一〇〇円ほど集金す。借りるときはヨイ顔をしても、返す時はなかなかかはかしくない家もある。私は午後から格子、腰板などのペンキ塗りをやる。今日は土用の丑の日なので、海水浴に行く人が多い。夕方浜辺を散歩したが上ナギ、涼風が吹きよい気持ち、暑中の海岸は実に気持ちよいものだ。この日全部で三〇〇円ほど入金した。

▼七月二九日

起床七時、暑さもきびしく上天気だ。熊さんは天野さんと農園の草取りに行く。私は一時頃早い昼食をとり、久し振りで美国へ出かける。新地の山の上から群来村まで自転車で行くのはゆるくないが、それから美国までは下りで楽だ。熊木へ寄つてから美国へ行く。㊶へ寄つたら二、三日中に入金すること、㊷へ寄り話をして、四時美国を出発する。四時半過ぎ、ヨに着いて休み、五時半家に帰る。夕食後たらい湯に入る。今日はずいぶん歩いたが身も軽くなつたようで気持ちよい。この日一〇〇余円入金する。かねて注文の八大謀用の大綱五〇個、三保丸に積んだと電信がくる。〇からの照会で安藤へ電信を打つ「フタカセアルカネへ」

▼七月三〇日

起床七時、暑さがきびしい。朝食後早々に、自転車で行く。大謀へ大謀用品の値段表を持参する。自転車で海岸を走るのなかなか爽快だ。ことに沖村街道は道路が少しよくなったので気持ちよい。帰途、沢江を回り一〇時帰る。岩内のあ

る漁業家の漁具類のセリがあつたが、特に必要なものも無かつた。この日、高太郎さんがヨの借家に新所帯を持つので、掃除や家財などの運搬で忙しい。子供らも大勢で手伝いする。夜、氷水を馳走になる。こざつぱりした新所帯だ。ムシ暑い風が吹く。

▼七月三一日

就寝中、三保丸が入港、㊸出し大綱六六個着いたと、モから通知を受ける。朝食後、新地へ行き大謀に渡し、中廊下に倉入れする。銀行、ヨに寄り、一時半帰る。ムシ暑く雨で降りそう。高太郎さんのところでは今晚、新宅祝い招待があるとして妻らが手伝いに行く。三時頃、五十嵐老父の死亡のお悔やみに行き田に寄る。畑物を見たり、いろいろ話をし、私の家の畑に寄り様子を見て帰る。土用中の暑さでスイカ、アジウリなどは日増しによい。八時から㊹によばれていく。傘支店の泰さん、忠さんらが客だ、一二時頃まで大いにやった。加藤内閣総辞職、東宮殿下は樺太への行啓を延期したと号外が出た。

町内の学校探訪

沖尋常小学校

4

◇沖国民学校と改称

昭和一六年三月、戦時下であったことから国民学校令が出され、四月一日、沖国民学校と改称した。

昭和一八年、児童数の減少から単級（一学級）編成となったが、昭和一九年九月から二学級の複式編成となり、昭和二一年からまた単級編成となった。

昭和二二年度学級編成（単級）

学年	男	女	計
一	三	三	六
二	三	二	五
三	三	五	八
四	二	八	一〇
五	四	五	九
六	三	五	八
計	一八	二八	四六

この後児童数は増えたが、単級は昭和二八年度まで続いた。

◇戦後の教育改革

日本の敗戦により、翌二一年七月には、北海道庁が御真影や奉安殿を撤去することを通達し、沖村の住民の寄付や、労力奉仕によつて建設された御真影奉置所もこれによつて撤去された。

また一〇月に文部省は、儀式で教育勅語などを奉読することを止め、天皇のこれまで『神』としての扱いを廃止した。

そして一一月三日に日本国憲法が公布された。（昭和二二年五月三日施行）

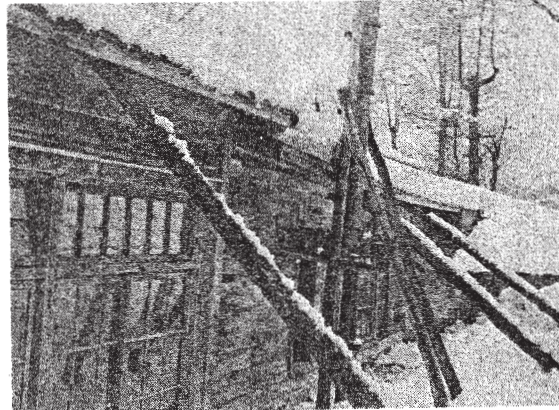
◇古平町立沖小学校と改称

昭和二二年四月一日、小学校

令により沖小学校と改称した。しかし明治三八年、当時の古平病院を解体して新築した校舎は、長い年月を経て腐朽が甚だしく、雨もりや外壁の損傷が目立つようになり、雪に押された校舎は傾斜して危険な状態になった。一時は倒壊を防ぐために木材で支えをしていた。



↑ 高台に建つ旧沖小学校玄関



◇新校舎落成

昭和二七年五月、定例の町議会で校舎を新築することが議決された。下の平地に新築する一

とにしたが、適当な敷地を得ることに苦労した。

昭和二八年五月一八日着工し、同年八月三十一日竣功した。福津組の請負で、木造平屋建て、総工費は約二三〇万円であった。

校舎面積は普通教室二、運動場、便所、玄関など四二三平方メートル（約一一八坪）であったが、校地の地均しや基礎工事の一部は村民の労力奉仕によるものであった。また、校舎に隣接する建物を買収し校長住宅とした。

その後、昭和三〇年に運動場を拡充することになったが、その整地作業も村民の労力奉仕によるものであった。

追憶の秋

大 澤 文 子

例年になく猛暑が続き、行き交う人々の言葉も、

「いやア暑い！」のひとことのみ。

特に夏に弱い私は、

「もう秋…」の言葉をどんなに待ったことか。丘の上に堤の下に小さな秋を見出すたびに喜びを感じる。秋…と言えは走馬灯のようにわが身をかけめぐる諸ものこと。

はじめて海の町に幼な子と共に越して来たあの頃、私には馴染める友もなく心の寂しさを満たすすべもなかった。だが…ふと思った。「私には書く」ことがある…と。それからの私は新聞紙上に…婦人雑誌に投稿をはじめた。中山周三先生選、そして芥子沢新之助先生選にも度々投稿した。

その頃から古平町の種々の行事にも携わることができ、昭和三十九年四月には民生委員を任命された。昭和六十二年退任するまで無事つとめ終え、その頃

の北海道知事横路孝弘様より戴いた感謝状をこの夜ひもとき感慨無量のおももちだった。

そうそうあの頃、私の受けもちの地域でもなかったのにお年寄りの方達が遠くから見え、

「あなア…」と、悩みをうつたえられることもたびたびのこと。私は優しくお話を聞いてあげるのだった。現在、そのお年寄りの方達はどうしているかなアと思うこともある。

昭和四十年頃にはまたいろいろな仕事かふえた。新聞紙上にたびたび投稿していた短歌を見られた、中学校教師の坂井満氏が突然わが家へ見えられ、

「余市の海鳴主宰北見恂吉先生のご指導を受け、短歌会をつくらないか…」との相談だった。その時のうれしさ、何もかも忘れただ短歌…短歌の文字でいっぱいだった。

いよいよ昭和四十年九月二十八日、会場もないまま信用組合

の二階の一室をお借りして北見恂吉先生をお迎えした。会員も十七、八名、初短歌会が発足したのだ。

「古平町岬短歌会」という名称も北見先生から戴き、休むことなく毎月勉強を続けたのだった。またその頃、北見先生のご指示を戴き、余市町の中村勝栄氏のお宅で『海鳴』誌の校正の仕事にも携わることができ、張りのある日々を過ごすことができたのだった。

また、やはり昭和四十年のまだ残雪の頃であったが、沢江町の男性有志の方々がわが家へ見えられ、「沢江町にはまだ婦人会もないので是非つくってほしい…」という。

一瞬、辞退したが根負けして、「まあやるか！」と承諾した。無から期待される会を作成することはむづかしい。

一室にこもりじっくり考えること二、三日。規約、会計会規、会費、会員募集等々その他出来上がり、いよいよ昭和四十年十一月十八日発会式となる。その頃の古平町長伊藤由松様、その他町役員の方々をお招きし「沢江婦人会」の名称も戴いた。その上、町長様より「書」まで戴いたことは今でも忘れることはない。

またあの頃、私も若かったが、敬老会にはご老人達の前で「あのねえ…」なんて、いろいろ楽しくお祝いの話をしたことが何回かあったが、沢山の拍手があつたことを忘れはしない。

ああそれからやはり昭和四十年二月頃であったが、若い女性達わが家へ押しかけて来られ「コーラス団」をつくってほしいと言う。音楽好きの私はふたつ返事で、早速、小学校の久保田氏を指揮者に依頼、私は札幌の玉光堂へたびたび出かけ、女性の歌えるような楽譜を選び求めて来てはコピーして渡す。白いブラウスに紺スカート、「なぎさコーラス」の女性達はすてきだった。

あの頃、思いがけないことに札幌からHBC放送局が来町、「十一月十五日、二十日の二日間『ママさんコーラス』の時間にラジオ放送したい」旨、泊まりがけて録音された。

また翌年には「第十三回道民合唱祭小樽後志大会」に出席、足立勇氏の指揮で「なぎさコーラス」出演。大音楽家上元芳男先生に好評を戴いたことを忘れはしない。

今宵、数々の懐かしい思い出に私はそつとピアノに触れていた…。

八月十八日〔晴〕 続く

この日、十九日の黎明を期して、連隊全員による一斉突撃は

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

橋 義 春 [遺 稿]

最前線の将兵に、大きなとまどいと混乱を招いた。そのために、停戦を前にして事故で亡くなった戦友も出た。

この日になって思い当たることがあった。十七日に古屯から八方山へ移動中に山の中で会った、師団司令部から来た下士官伝令の人達に、馬の鞍探しを手伝った時、一人の上等兵が別れ際に私に小さい声でこう言っていた。

「戦争の終わりが近いかも知れないよ。それまでお互いに気をつけてがんばりましょう。どうもありがとう」

と言って、八方山の方へ馬を飛ばして行つたが、私には、「戦争の終わりが近い」

の意味がわからなかった。彼等は八月十五日の終戦を知っていたのではなからうか。それと、停戦命令書を持って来ているので、兵隊同士の気安さから、私に間もなく停戦協定が結ばれる。死に急ぐなど、それとなく暗示していったものと思われる。

軍旗は停戦の決定により師団

司令部へ返還することになり、連隊旗手式部少尉が持ち、護衛の将校・下士官と共に山を下って行つた。八方山はいまや完全に敵の重囲下であり、それを突破することは至難の業であろうと思われる。無事を祈るのみである。

真つ暗闇の真夜中、もう砲声も銃声も聞こえなくなり、八方山は久し振りに静寂を取り戻した。戦争はもう終わったんだ。

だが私達はこれからどうなるんであろうか。タコ壺の中で不安な夜が過ぎていった。

【戦 況】

★早朝からソ連軍は、八方山の二ノ稜・中ノ稜陣地に激しい攻撃を仕掛けて来た。この稜線上でまた両軍必死の攻防戦が展開された。

二ノ稜陣地に、火炮の援護射撃の下に一举に突っ込んで来た敵と、間近で凄じい死闘を繰り返し、敵味方共に多くの死傷者を出した。

中ノ稜・半月台・師走台の陣地にも、戦車三輛を先頭にして歩兵部隊が侵攻して来たが、わ

が連隊砲がこれに砲撃を加え撃退した。

★明朝、黎明を期して全軍一斉突撃の命令が出る。

★師団からの停戦命令により、ソ連側と停戦交渉に入り、十九日零時を期して戦闘中止、武装解除することになった。

八月十九日〔晴〕

武装解除となり下山

ソ連軍の捕虜となる

停戦一即ち敗戦である。これからのソ連側の日本軍人に対する取り扱いと処置ははどうなるのか、私達兵隊には想像もつかないし、誰も経験をしたこともない捕虜というものを体験することになるのだ。

かつてソ連軍と満州との国境線で起きたノモンハン事件とは停戦の条件も違うようだ。あの時は停戦協定で双方が前線から引き下がり、新たに国境を定め、この紛争は一応解決している。

— 続く —

即ち玉碎である。この命令から一転して、停戦・武装解除・陣地の撤収命令は、八月十五日の終戦の大詔喚発を知らない私達



一つの対象

瀧内 優子

昨年はセタカムイ紙上でローソク岩のことが話題になりましたが、私もそれに誘発されて、十五、六年前のことを書いてみました。

それは古平町文化会館で、あるタレントの講演会があった時のことです。

タレント本人は褒め称えるつもりで言ったのでしょうか、「古平町の入り口には男性のシンボルが海上に突き出ている。それに象徴されるように、この町には元気なお年寄りが多い——」

と、講演の冒頭に言いました。この言葉に、私はとても違和感を覚えました。

平成四年のこと、私が愛読していた『大法輪』八月号に、大栗道栄和尚(東京都大日寺住職)さんが積丹半島を旅した

折りの逸話として、「余市、古平の中ほどの海上に観音岩を拝顔することができた。正に魚籃観音菩薩である。自然の造形であるこの観音様にお会いできたのは、終生忘れられない感激であり、まことに不思議な出会いであった。さらに帰途には、ハイヤーを豊浜の先の方までまわしてもらって、十分ほど拝顔をした」と記されていましたが、この文章を読んで、タレントの言葉で

む望を岩燭蠟りよ塲漁泊島字村冲市余(國志後)



↑ 名勝地として紹介されたローソク岩(明治42年)

胸につかえていたものが一気に落ちたような気持ちになったのです。

このことから、その人の生活環境や心の持ち方によって、一つの物事にも裏も表もあると感じました。

例えば歌を作る上においても一つの対象を何人かで詠んだ場合、作者の心の在り方如何で、随分と違った内容の作品が出来上がると考えた次第です。

※ 短歌『ホテル山水』付記

昭和四八年頃のことだそうです。当時の古平えび籠組合が、ホテル山水を貸し切りで一泊旅行をしたことがありまして。大女将は私達が古平から来たと聞いて当時のことを大変懐かしがって、それこそ涙を流さんばかりにして喜んでおりました。大漁で景気の良かった頃の古平のことが思い出されます。



た。



体中が汗でくたくたになって家に帰った私に妻は、「どうしたの」と聞く。事情を話すと妻は、「よかったしょ。二日酔いの酒が抜けて、すがすがしく運動会ができるしょ」と言うのである。

私は腹を立てながらも、苦笑した。苦勞を共にした佐藤末治さんも、田中仁先生も今は亡い。

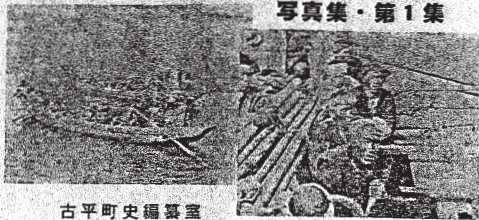
唯々、ご冥福を祈るばかりである。

そして、あの急勾配の石段を、何度も登り切れたのは、若かったからできたのだな、と当時の朝のことを懐かしく思い出すのである。

第1集

古平のしん漁

写真集・第1集



古平町史編纂室

第2集

古平のしん漁

写真集〈第2集〉



古平町史編さん室

第8集

敬老の日

思い出の アルバムをめくる



古平町役場福祉課

第5集

文化祭
展示

古平の風景



古平町史編さん室

古平町史編纂室

第3集

ふるさとのアルバム

〈第3集〉

古平の



建物

古平町史編纂室



第7集

古平町史

（生活文化）



古平町史編さん室

第4集

写真が語る 古平の歴史

文化祭展示写真目録と解説



古平町史編纂室



古平町史編纂室

第6集

古平町史編纂室

郷土の石碑散策

（第6集）

古平町内の石碑を訪ねる

ふるさとアルバム

【ふるさとアルバム】として第10集まで刊行しましたが、好評で再版したものもあります。そのほかたらつり節などの資料も合わせて、閉店セールで在庫を一掃しました。

聞くとくところでは、第10集・すけそ漁の表紙の美人？ が大変話題になったそう

ですが、町内にはたくさんあります。

また、今回の《すけそ漁写真展》の作品は、お亡くなりになった服部昇司さんが昭和50年前後に撮影されたものが多く、古平町のすけそ漁を知る上で貴重な資料でもあります。お借りすることができてお礼を申し上げます。

第10集



古平町史編さん室

第9集



古平町史編さん室

浜町・西嶋照子さんから 火縄銃の寄贈を受けました

現在では火縄銃は大変珍しいものですが、武器ですので所持するには警察の許可がいります。

火縄銃については、九州の南方の種子島に漂流して来たポルトガル人によつて、初めて日本に伝えられたという話は有名です。これが文化一二年（一五四三）だと言われて

火縄銃

いますが、それ以前に中国（明）や朝鮮から伝わって来たという説もあります。

とにかくこの新兵器、一名種子島ともいわれていましたが、鉄砲はまたたくまに各地に広がり、合戦での威力はテレビなど時代劇でも見るとおりです。

寄贈された火縄銃は全長が一三八センチ、銃身が一〇八センチ、銃口の直径が八ミリ、重さが四一キロです。



ものの本によりますと、弾の届く距離は約五〇〇メートル以上ありますが、命中精度を考えると、実戦では一〇〇メートルくらいの距離から撃ったそうです。何にしてもパチンコの玉くらいの鉛弾が、轟音とともに飛んで来るのですから恐怖心を与えるには充分です。

熟練した者だと、二〇秒ほどで発射準備ができましたが、何発か撃つと火薬のかすが銃身にたまったり、火縄の火が消えたりするので、発射の間隔を一定にするのが難しかったといえます。火縄で着火するので、雨の中では撃てないのが最大の泣きどころでした。

また、鉄砲の出現は女性を強くしました。体力ではとてもかなわない男性にでも、銃の引き金を引く力さえあれば相手を簡単に倒すことができたからです。アメリカの西部開拓の歴史・西部劇を見るとよくわかります。

短歌

古平町岬短歌会

さかさごとにならぬやうにと言ひ合ひしに末の弟逝く
われらを残して

池 田 テ ル

草の上に生まれし虫も秋の夜を露と戯れ涼けく鳴くも

金 子 寿 子

俄雨にぬれながら走る生徒らの弾ける声に空は明るむ

坂 本 信 子

果物の酢ゆき香ただよふ余市町清らな道はいづく辺までも

鈴 木 時 子

夏も去り一雨ごとに色付きて小庭に目を引くほづきの朱^{あか}

田 中 香 苗

電車待つ暑きホームに咲き盛る朝顔の花は水色いという

丹 後 初 江

サルビアに交る穂草を抜き取りて調ひし庭秋の風吹く

東 美 知

さはやかに寄るさざ波は小さき音たてて磯辺の浜石ぬらす

堀 典 子



古平俳句会

一と呼吸おいて又鳴る鳥威 齊藤波留

風風いで芒の道もいでにけり 山口悦子

長き旅里の河口に鮭群る 越野敏雄

残されし老いに日毎の盆供養 大和田絵伊

挿してある鬼灯うれし里の駅 高橋重子

せせらぎの音の変りに秋九月 仲谷比呂古

露動く今朝の潮目の漁模様 室谷弘子

一人旅無人駅舎に秋時雨 外山俊久

野分去る鋭き風を束にして 渡辺嘉之

こほろぎの蟋蟀を恋ひ声すたく 堀 典子

僚船の無線飛び来る漁場の月 本間寿昭

霧しまく神仙沼の沖にかな 越野清治



雜 詠 「十一月号」

主 宰 水 見 壽 男

ひそひそと風は晩夏を伝へけり
夏霧や港の汽笛かすかにて
夕闇に大樹の葉ずれ晩夏かな
六十年海峡つなぐさくらんぼ
風強く沖合ヨット海猫が追ふ
満帆のはらみしヨット波を切る
沖めぐるヨット傾き湾に入る
夏の月渚にからむ影二つ
彩を変へ人を潤す夏料理
モーツァルト安らぎの丘秋近し
暑に耐ふることも試練の齡となり
木下より来る涼しさに身を委ね
雲の峰岬に崩れまた崩れ
炎天の岬に海鳥みじろがず
潮の香を鮮度が自慢夏料理
花の雨惑ふ心に降り止まず
美しき雨の雫と花菖蒲
雨に濡れ色鮮やかに七変化
日一日馬が草食む夏野かな

山 口 悦 子

越 野 敏 雄

高 橋 重 子

室 谷 弘 子

句 評

外 山 俊 久

玫瑰や栄華を知りし番屋跡
風の止み夕立雲の来りけり
虹立ちて空は巨大なキャンバスに
ゆらゆらと海の底まで西日差す
【句 評】
渡 辺 嘉 之

潮さして来る音に咲く月見草
堀 典 子

土用風荒れるる宵の潮高し
岬の夏大海原の落暉かな
父子碑に一献まるらす祭かな
本 間 寿 昭

大河口此処より先は夏の海
片陰を持ち帰りたる家路かな
蟬時雨結界のなき海と空
【句 評】
越 野 清 治

徒ならぬ岬の海霧の迅さかな
飮して峡深きより青葉木菟
万緑を吹き上げて行く沖の風
夜釣人こゑ高く闇深かりし
筒鳥の声に樹海の深さあり
【句 評】

『俳句朝日』九月号 今井千鶴子選

浜風に五月の雲の流れゆく
野の風を振り切る雁の別れかな
越 野 清 治

■北海道新聞『日曜文芸』 高橋笛美選
南風や波は礁につまづきぬ
七月の峰青々と漁日和
本 間 寿 昭

古 平 俳 句 会

怒 涛

〔二六〕

― 二月号 ―

島一つ靄のかげより実玫瑰 越野清治

秋風の統ぶ海原の平らかに

一と呼吸おいて又鳴る鳥威 斉藤波留

石狩の実の玫瑰や句碑親し

名月や法螺貝を背に山の僧 山口悦子

人群れて熊野古道や竹の春

ななかまど海一望の喫茶店 越野敏雄

秋の風湖の浮舟さざめきぬ

初漁のいずし用とし鮭届く 大和田絵伊

佛事の多き八月の過ぎ易し

トンネルを抜けて紅葉天を突く 高橋重子

帰りみち一人に岬の秋夕焼

深山晴峰より秋の声を見ゆ 本間寿昭

石仏を撫で行く子等に末枯るる

残菊の意地を見せたる色香かな 室谷弘子

麦秋の風に乗り来し大漁船

居酒屋のあれやこれやの秋を喰ふ 外山俊久

音もなく小雨降り来る秋の声

とどまりて蹟くことも秋の風 渡辺嘉之

秋晴て海の底まで空の色

秋の日や沈みゆく色一途なる 堀 典子

訛りある言葉やさしや里の秋

秋天の里に近づく雲白し 仲谷比呂古

雲低し潮盛り上がり秋暑し

筆太く掲げたる書は黒々と相田みつをの人柄しのぶ
一階ロビーに焚たる香のただよひて旅の疲れを癒してくる
格子戸に囲まれし部屋十畳ほど香炉のみの余白の空間
遠き日に五階建のホテル貸し切りて大漁旗あげし蝦老組合は
大女将は懐しむがに語りけりありし日の蝦老漁の賑ひを

ホテル山水

瀧内 優子

石庭は掃き清められ座す我も姿勢正しく背をのびしをり
行灯の灯に導べかれ植込の廊の行く手に灯火の湯のあり
露天風呂狭き空間より吹く風に青竹のなびくも清々し
おもてなし手料理競ふ白老の豚これ亦旨し胡麻ドレッシング
フィナーレ従業員一同舞台にて踊りくるるはマツケンサンバ

編集雑記

していますが、ついぞ釣ったところ
は見られませんでした。

▽一般に旧暦と言われている暦で
は十一月の別称は「霜月」ですが、
本当に霜が見られるようになり
ました。春はのたりのたりですが、
秋から冬にかけては駆け足です。
七日は「早立冬」とあります。

▽文化の日、勤労感謝の日と、今
月は祝日が二日あります(年に十
四日)。それとは別に「〇〇の日」
というような記念日や、民間で設
定した催しものの日があります。
一日は灯台記念日と計量記念日
です。こうして見てみると、何も
ない日は一日もありません。

▽実りの秋になりましたが、古平
の秋の風景も昔とは大分変わつて
きました。農家では田んぼの稲刈
りで賑わうのですが、今はコンバ
イだけが走っていて人影もありま
せん。刈取った稲はハサに架けら
れて、それが農村のひとつの風物
詩ともなっていました。今はほ
んど見られません。

▽一方海では昔は見られない風景
が広がっていました。この寒風のな
かサケ釣りの太公望たちが、古平
河口一帯に大物を狙って竿が林立

驚いたのはこの寒さ、波のあるな
か、サーフィンを楽しむ人達でし
た。もつとも波がなければサーフ
インはできませんから当然ですが、
いくらウェットスーツを着ていても
素手に素足ですから寒いはず、さ
すがに陸に上がるとお湯の中に足
を入れて温まっていたようでした。

▽水産国・日本もこのところ「難
続き、捕鯨禁止からマグロの漁獲
制限、最近では「スケソウ禁漁」な
どという物騒な話題が新聞にも
載るようになりました。先の文化
祭作品発表会では、昭和五〇年前
後の古平港のスケソウ漁を三〇枚ほ
どの写真で紹介しましたが、陸揚
げされたスケソウで埋まっていた荷
場場の状況を見ていると、三〇年
くらいは経っているのですが、まる
で遠い昔のような気がします。

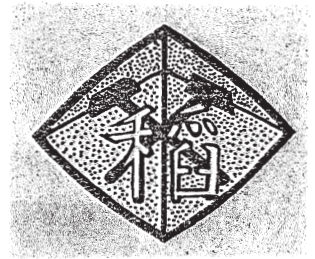
先日新聞報道「資源量を調査
したところ、日本海北部で平成二
年頃は八〇万トンだったものが、今
年は十四万トンにまで減少、資源の
回復も急には望めない」とありま
す。制限には産地の不平不満がつ
のついているということです。

古平町史年表

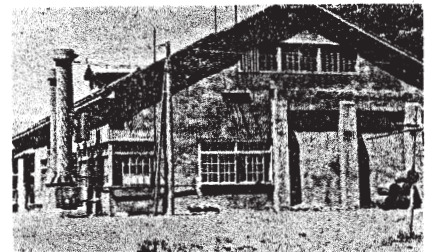
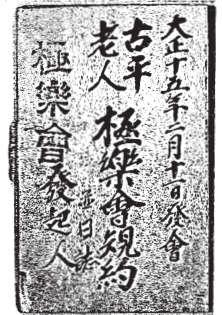
昭和27年 (1952)

- ▲漁業法の改定により、古平漁業会が法定解散をする
- ▲森林法改正により古平森林組合の総会が開かれ、植林の奨励を町に要請する
- ★稲倉石小・中学校が校章を制定する
- ★古平老人極楽会が禅源寺で協議会を開き再発足する
(大正15年発会) 会長 山田常次郎
- ▲小樽開発建設部原技官等が、神恵内～六志内間の道路建設のため踏査する
- ▲沖村道路で雪崩により、平野正国(21歳)が死亡する
- ▲博洋丸の乗組員が海中に転落し行方不明となる
- ★古平漁業協同組合の冷蔵車が改築落成する
- ▲古平中学校建築寄付金について協議会が開かれる
- ▲台風のため住宅などが倒壊した外漁船等にも被害が出る。古平小学校運動場が危険だとして使用禁止になる
- ▲古平警防団を古平消防団に組織替える
- ▲余市～余別間・岩内～古平間鉄道敷設の請願が国会運輸委員会で議決し、7月31日官報に告示される
- ★古平中学校第1期新築工事の竣工式と、開校5周年記念式典が行われ、新校舎に移転する。併設されていた余市高等学校古平分校も同時に移転する
- ▲「石狩湾をわれらの手に」底曳き漁船の規制強化を要求して、沿岸漁民総決起大会が開かれる
- ▲古平小学校の運動場補強工事が完了する
- ▲古平漁業協同組合の組合長以下役員が総辞職する
- ▲沖村漁港(第1種)船入潤の建設を申請する
- ▲古平漁業協同組合が沿岸魚田改良のため投石事業を行う
- ▲禅源寺境内に建立した野村泊月句碑の除幕式が行われる
- ▲戦後初の教育委員選挙(道・市町村)が行われる。町教育委員に山口忠治・吉野金治・近藤雪一・橋本善二・宇須井昇の5名が当選する(互選により教育長に宇須井昇が就任)
- ★ホトトギス同人・俳誌「芹」主宰の高野素十が今行のため来町し、町内の俳句愛好者に指導する
- ▲古平小学校七十七周年を記念し、水見句丈が高野素十から句碑に刻する句の揮毫をうける

→ 稲倉石中学校校章



→ 古平老人極楽会帳簿



↑ 改築した古平漁協冷蔵車



↑ 古平中学校新校舎落成式

→ 高野素十(本名興己)

